

「ちわっす〜。ユーキに呼ばれて来たんすけど〜」

バックも無しに、部屋に入ってくる、無作法な少女。いかにも悠輝の友人っぽい、今風のギャル。

「おじさんすか〜。いい金ヅル…じゃなかった、お小遣いくれる優しいおじさまって〜」

本音を隠しもせずに、へらへらと作り笑いを浮かべ、男を見定める。男は全裸なのだが、全く動じない。男の裸など、見慣れている風だった。

「ユーキどこっすか〜？あの子もう来てる筈なんすけどお」

バカそうなしゃべり方で、悠輝の姿を探す。悠輝と同じ制服を着崩した、オシャレな女子〇生だった。シャツ越しにも、そのグラマラスな胸のサイズが図れる。悠輝より、遥かに大きなモノを持っていそうだった。男は、欲情する。

「悠輝ちゃんは、隣の部屋でへばってるよ。おじさんとのセックスで、何度もイカされてたからね」

「ホントっすか〜」

目の前の女子は、疑り深い眼で見る。悠輝は、かなりの美少女で、エロい事大好きな、淫乱女子〇生。その辺の大人など、軽く手玉に取る。こんな冴えない中年に、どうにかされるとは思えなかった。

「キミもすぐに分かるよ。さあ、おいで。おっと、名前は？」

「ユリコっす」

揺子と名乗った少女は、何の躊躇いもなく、シャツのボタンを外し始めた。

「ホントに大丈夫っすか〜？ユーキとやった男は、もう足腰立たないって評判っすよ〜？」

服を脱ぎながら、
そんな事を言う揺子。
ブラジャーをぱっと
外し、乳房を見せる。
何の躊躇いも無い。

「ま〜アタシにかかれ
ばあ〜、どんなインポ
でもビンビンになる
っすから〜安心ッス」

形の良い、巨乳を揺らしながら、
ショーツに手を掛ける。男が
既に勃起しているのを見て、
ニヤニヤ笑う。

「凄い身体だね。
まるでAV女優だ」

「よくスカウトされるっス」

ヤリマンの揺子。援交
の相手は多数に及び、
中には業界人も居る。
揺子ほどの美貌と、
愛嬌と淫乱さを持った
女は、滅多に居ない。

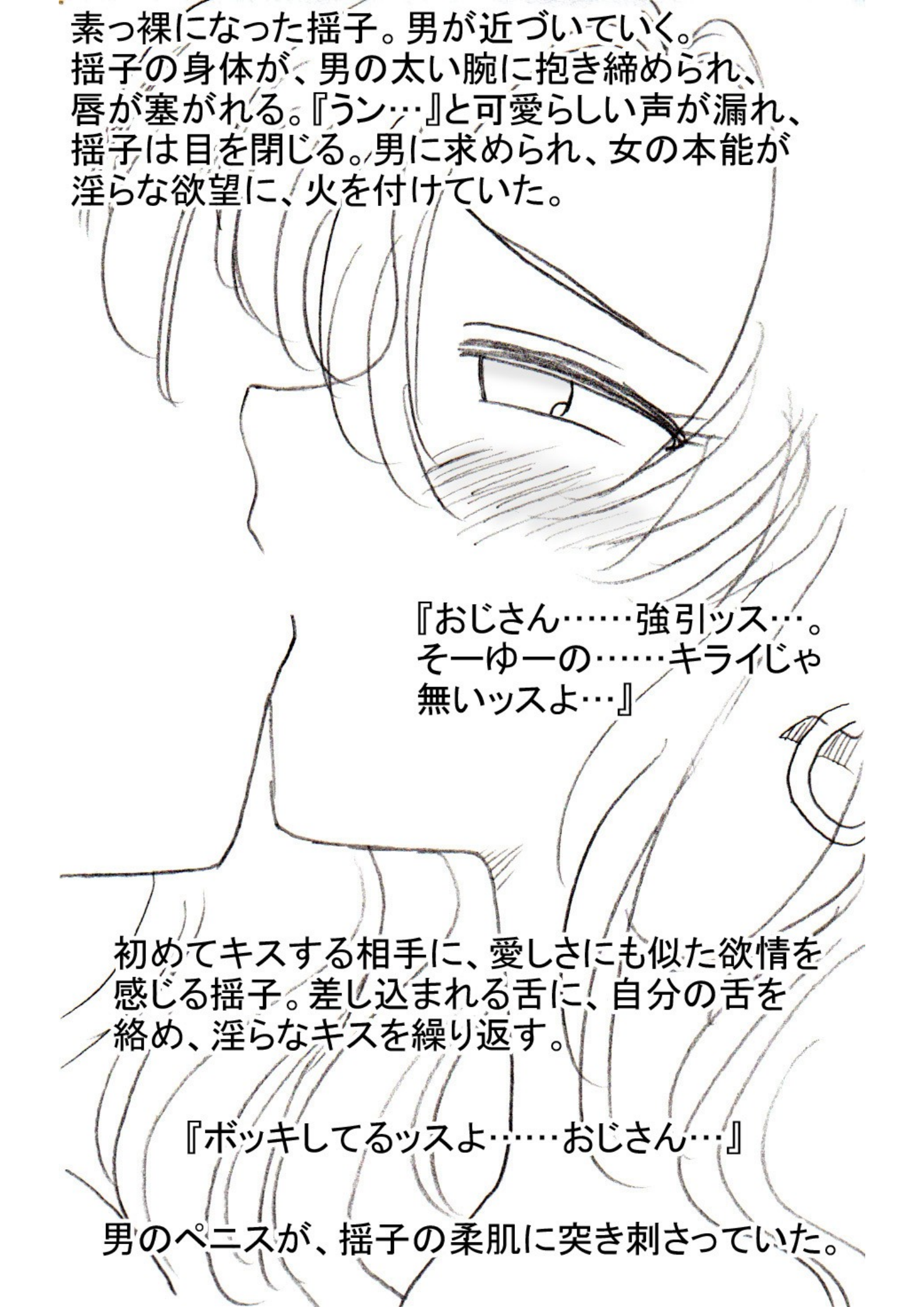
「ほらほら、見せるッスよ〜、
マッパになるッスよ〜」

挑発的に、パンツを脱ぐのを
焦らす。

「見えるって何を？
ユリコちゃん」

「オマンコっす。もう一度言うッスか？
まんこ。おまんこッス」

どうだ、とでも言わんばかりに、はっきりと言い放つ揺子。
淫語など、女子〇生にとっては日常会話だった。



素っ裸になった揺子。男が近づいていく。
揺子の身体が、男の太い腕に抱き締められ、
唇が塞がれる。『うん…』と可愛らしい声が漏れ、
揺子は目を閉じる。男に求められ、女の本能が
淫らな欲望に、火を付けていた。

『おじさん……強引ッス…。
そーゆーの……キライじゃ
無いッスよ…』

初めてキスする相手に、愛しさにも似た欲情を
感じる揺子。差し込まれる舌に、自分の舌を
絡め、淫らなキスを繰り返す。

『ボッキしてるッスよ……おじさん…』

男のペニスが、揺子の柔肌に突き刺さっていた。

「ふ……っ、うん……っ、ん——っ……」

男に抱き締められ、尻を弄られる揺子。男の勃起したペニスが、お腹に当たり、その固さと大きさに興奮する。

『ユーキ……こんな
デカチンとチンポ
したッスか……？
羨ましいっス……
まあアタシもこれから
するんスけど……』

ちゅっ…

ちゅ……

「んんっ…」

揺子は、まるで恋人の前で出すような、甘い声を出して喘ぐ。目の前の初対面の男に、愛しさを感じていた。ヤリマンギャルは、いつでもどこでも、気に入った男には、その場で恋をする事が出来た。これが出来なければ、援交など出来ない。愛嬌の無い女に勃起出来る男など居ないのだから。

「可愛いよ、揺子ちゃん」

「おじさんも……素敵ッス……」

ふにゅ、ふにゅ……
びんっ……！

揺子は、お腹を押し付け、ペニスを愛しそうに愛撫し、その固さを感じながら、興奮した。

「あんっ……！あんっ……！ああんっ……！！」

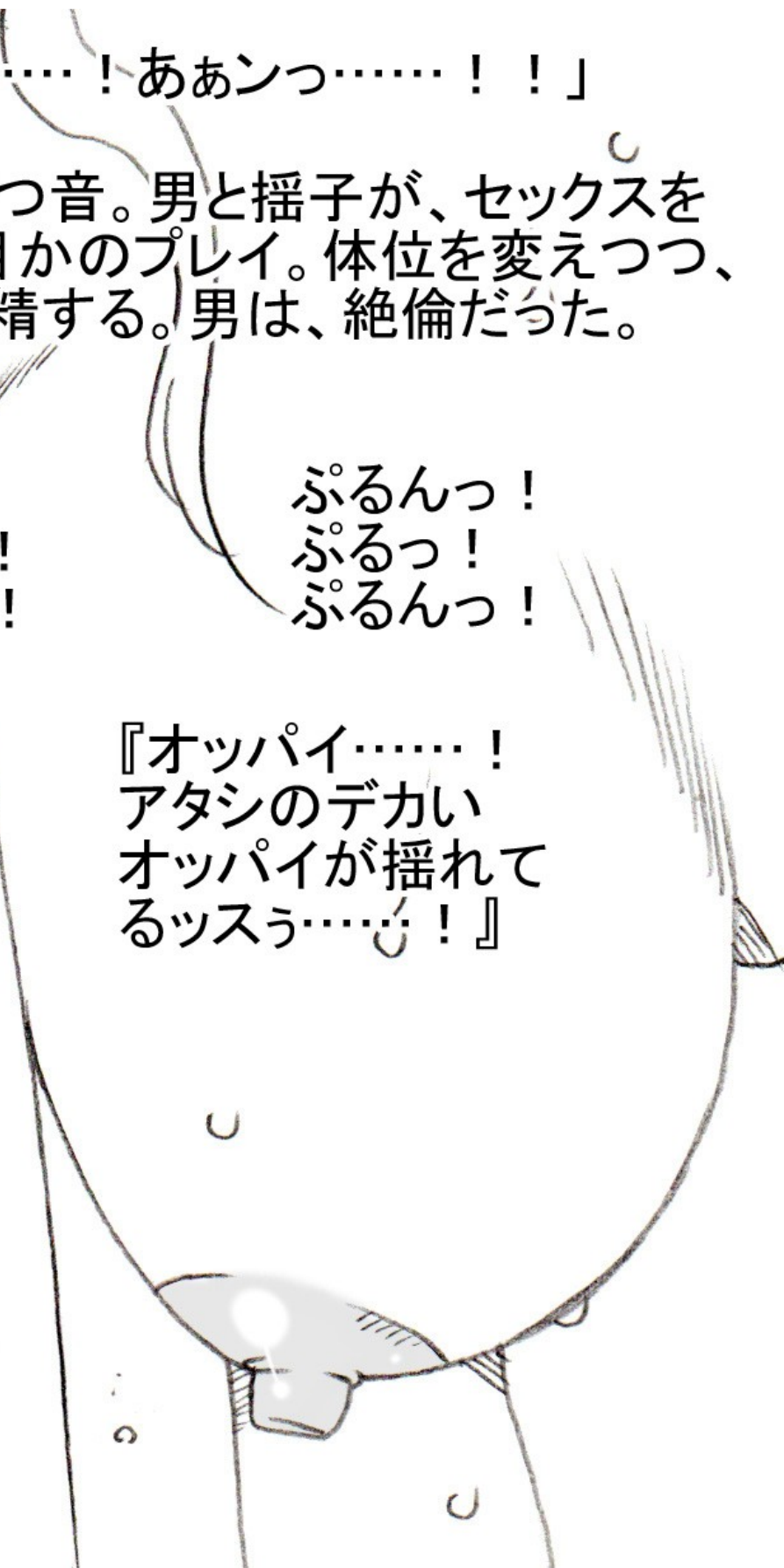
パン！パン！と尻を打つ音。男と揺子が、セックスをしている。既に、何回目かのプレイ。体位を変えつつ、何度も繋がりが合い、射精する。男は、絶倫だった。

「す……スゴイっす
……！おじさん……っ！
こんな……！ああ……！
まだカタイっす……！
ち、チンポ超カタイ
——っ！」

ぶるんっ！
ぶるっ！
ぶるんっ！

『オッパイ……！
アタシのデカイ
オッパイが揺れて
るッスう……！』

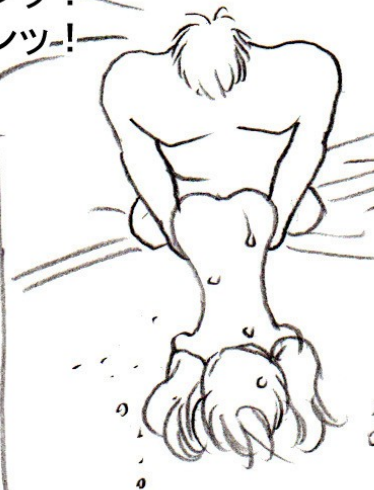
乳房を揺らしながら、
四つん這いで男に
犯される揺子。男の
精力に驚きつつも、
自らもそれを楽しんで
いた。今時の女子〇生
である揺子は、セックス
大好きな、淫乱少女
だった。



「どうだ？ 揺子ちゃん。俺とのセックスは……！
イイだろ？」

「イイっす…！ 超イイッスう…！ 自分…！
こんなイイセックス…！ 初めてかもッス…！
あ……ああんっ！！ あん！ あん！ あん！」

パンッ！ パンッ！
パンッ！ パンッ！



男は、屈強な肉体と
精神力を持った、
異常者。その身体
能力と、精力は
普通の人間を凌駕
していた。

「ああん……！ イクう……！ イクっすう……！ アタシ
こんな何度も普通イカないッスう……！ おじさん
凄過ぎるッス……！ ああ……！ いく！ いく！ いくウ！
あああんイクうう——っ！！」

「ほら！ イケよほらっ！ この淫乱女子○生！！」

「あはああ……！ あっ！ あっ！ イ！ イクっ！ あうっ……！」

びくっ！ びくんっ！
ビクッ！
ビクッ！
ビクッ……！



揺子は、親友が殺されて、その死体がすぐ隣の
部屋に転がっているのも知らずに、その殺人を
行った男と、今まさにセックスをし、何度もイカされ
ていた。

「あん……スゴイッス……」

びゅるっ！！びゅるっ！！びゅるんっ……！！

揺子の膈内に、大量に吐き出される精液。とても、何度目かの射精とは思えない。

「ホントにユーキとした後ッスか？
あの子結構エロいっすよ」

信じられないようなものを見る目で、男を愛しそうに見詰める。実際、男は悠輝の身体に、20回は射精した。異常者なので、決して萎える事も、精子が尽きる事も無いのだ。

「ユーキに聞いていいッスか？
ホントにおじさんとやったのか
って」

揺子は、折角だから、大好きな悠輝と一緒に、この精力絶倫おじさんと乱交プレイがしたいと思った。悠輝と揺子はタイプが違うので、複数プレイが刺激的で、それを目的にする客も居る。揺子は、隣でへばっているらしい悠輝を探しに、ベッドから出た。隣室のドアへと、歩き出す。男は、美しい揺子の後ろ姿を見ながら、更に勃起していた。

「こっちッスかあ？」

ガチャ…

ドアノブに手を掛ける
揺子。裸のまま、
身体を隠しもしない。
幼さを残す、スレンダー
タイプの悠輝と違い、
揺子の身体は、もう
完全に大人の女だった。

「すごいエロいよ、
揺子ちゃん。いい尻だ」

「ありがとッス」

揺子は、礼を言いつつ、
ドアを開け、薄暗い部屋
へと、足を踏み入れた。
背後に背案る気配にも
気付かずに

「え……？」

部屋の明かりを点ける。そこには、目を見開き、舌を突き出し、驚愕の表情を浮かべ、瞬きもしない悠輝の姿があった。

「……？
ゆーき…」

今までこなして来た、数々の援交で、ハードなプレイの果てに、動けなくなる事はあった。合法ドラッグでアへらされた事も。しかし、これは何か様子が違った。本能的に、ヤバいモノを感じる揺子。

『ヤバイッス……！
これヤバイ奴ッス！
逃げないと…』

瞬きも完全に止まった悠輝の顔を見て、揺子はそう判断するが。

「おっと、どこに行くんだい？」

どん、と何かにぶつかる。揺子のすぐ後ろには、男が立っていた。

「ちょっと急用を思い出したッス……、帰らせて…」

そそくさと、男の横を通り過ぎる揺子。男は、素早く揺子の頭を掴むと、そのまま横に90度に捻る。ぐきん、と軽い音がして、揺子の首が、変な方向へと曲がった。

「えげっ…！！」

視界が、急に回転し、何が起きたか分からない揺子。首の骨が、へし折られたのだと分かる頃には、揺子の脳は、思考が停止していた。

「……っ、——……っ」

手足を、じたばたさせる揺子。それは、抵抗しているのではなく、脊椎が破壊され、視神経の命令が、滅茶苦茶になっているためだった。

「……、……っ」

びくっ、びくっ、と身体が前後に痙攣する。大きな形の良い巨乳が、ぷるん、ぷるん、と本人の意思に反して、可愛らしく揺れていた。

「あーあ、折角悠輝ちゃんの前で、生きたまま犯しまくりたかったのに」

がくん、と膝をつく揺子の頭を、
両腕で支える。力を失った身体は、
断末魔の痙攣で、がくがくと
操り人形のように震えていた。

「すっげーボッキするっ……！」

男のペニスに、凄まじい勢いで
固くそそり立ち、我慢汁を噴き
出している。殺人鬼である男は、
女を殺すのが、一番興奮する
行為だった。

「どうだ悠輝ちゃん……！
親友の揺子ちゃん、死んだぜ
……！今まさに首の骨
折られて、おっぱい丸出しで
くたばったぜ……！ああ…
びくんびくん言って可愛い…！」

がくがくがくっ！！ぶるぶるぶるっ！！
突然の肉体の死に、脳が滅茶苦茶な
命令を出す。最早、絶対に放送出来ない
レベルの動きだった。

「これだよこれ……！これがいいんだ……！
ああ……！い、いく！もうイっちゃう！！
ああっ！！」

びゅるっ！！びゅるっ！！
びゅっ………！！

男は、痙攣しまくる揺子の
背中に、思い切りザーメンを
発射しまくった。

「あーすげー……出してもボッキ止まんねえ……！」

ようやく痙攣も止まった揺子。腕を掴むと、頭がだらんと前に垂れ下がる。明らかに不自然な角度に、首が曲がる。首の骨が、完全に粉碎されていた。固まった表情で、逆さを向いた顔が、床に寝そべる悠輝の死体を見つめている。自分が死んだ、という事実すら、もう気付いていない表情だった。揺子はもう、完全に絶命していた。自身の死など、理解できる筈も無い。

「どうだ？親友の目の前で自分も死ぬって気分は。オッパイも丸出しだよ」

ぽよん、と揺子の頭が、自身の豊満な乳房に当たる。後頭部が、自分の乳房に当たるなど、普通ならば有り得ない事だった。

「改めて見ると、二人ともすっげー美少女だよな。まるで男をボッキさせて、セックスするために居るかのようなエロさだぜ」

床に倒れる、悠輝の裸体を見る男。仰向けに寝そべっても、形を崩さない悠輝の乳房。乳首が立ち、男に愛撫されたがっているかのようなようだった。

「死んでも男をボッキさせるなんてよ……！」

男は、まだほんのりと温かい、揺子の乳房をむにゅむにゅと揉んだ。二人の乳房の違いを見て、興奮していた。

ぎっし、ぎっし、ぎっし……！
ベッドの上で、揺子の死体と
繋がりが合い、セックスをする男。
豊満な乳房を鷺掴みにし、
その柔らかい感触を楽しむ。

「ほらほら、首が変な方向を
向いてるぜ、どうした？」

激しいベッドの揺れに、
揺子の折れた首が、
がくんがくんと背中で
振り子のように揺れる。
鏡越しに、逆さを向いた
揺子の張り付いたような
表情が、男を見詰めて
いた。

「あんなにエロい声出して
腰振りまくってたくせによ。
すっかりマグロだぜ」

がくつ、がくんつ、がくつ…

揺子は死んでいるので、動かないのは
当たり前だった。

「ま、でもこんな可愛けりゃ、
マグロでもボッキするぜ。
どっかのバカと違ってな」

男は、ビンビンに勃起したペニスで、
揺子の身体を下から貫き、その
身体を犯す。瑞々しい、女子〇生の
死体。それを犯すのは、ネクロ
フィリアの男にとって、最高の興奮
だった。

むにゅ、むにゅ、むにゅ……っ！

ぎゅっ…！

むにゅっ、ぶるっ、
ぶるんっ…！

「あー……何てエロいオッパイだ……！
醜い垂れたオッパイとか違うぜ……！
オッパイだけでイっちゃう……！！」

男は、頭の見えない女子〇生の乳房を見ながら、
そのまま膣内に射精した。



「はあ……！はあ……！チンポイクっ！チンポイクぜ……！ユリコ！！」

パン！パン！と揺子の身体を、バックから犯す。つい数分前まで、生きていた揺子と、そうしていたように。

「あの時は、顔見えなかったよな！ほら！お前の可愛い顔見えるぜ！バックなのに顔正面向いてる！ああ！こんなの…！死んでる女としか出来ねー！ああもういく！いく！ああゆりこっ！！あ——っ！！」

がくんっ！

がくっ！

がく！がくんっ！

揺子の身体を、乱暴に犯す男。もう死んでいるので、何の容赦も無かった。激しいピストン運動。肌がぶつかり合い、ぶるん！ぶるん！と柔らかいヒップが波打ち、震える。それは、さっきまでの生きている揺子とのプレイと同じだが、一切の反応を示さない、死体であるという点が違った。男は、あっという間に射精する。

パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！

ぬふ！ぬふ！ぬふ！ぬふ！

「ああ！！ゆりこっ！！愛してるよユリコ！チンポイクっ！ザーメンビュって出る！マンコに射精するよ！ほら！妊娠しな！！俺の子供！ああ——っ！！」

びゆるんっ！！男は、もう妊娠しない揺子の膈内に、遠慮なく射精した。

「俺のチンポ美味しいだろ……？ユリコ。んっ……
そんなに欲しいのか？首が変な方向いてるぜ」

ぐっ……！

ぐぽっ……
ぐぽっ！
ちゅぽっ！

身体は向こうを
向かせたまま、
無理矢理フェラを
させる。こういった
死体ならではの
プレイが、男は
大好きだった。

「ほら、オッパイ正面向いてるぜ……鏡見てみなよ
ユリコ……！ほら！ほら！」

男は、鏡に正面を向きながら、後ろの男にフェラをする
不自然な格好の、少女の後頭部を見つめながら、
興奮の絶頂に達し、そのまま揺子の口内に、ザーメンを
思い切り発射した。

「ほらっ！出すぜ！んっ……あっ！！ああっ！！
どうだほらっ！このヤリマン女子○生！いくら
お前でも、バックで顔射精なんて初めてだろ？
ああ可愛い……っ！尻とか背中見ながら射精
なんてっ……！首の骨折れた女ならではだぜっ！」

びゅっ！びゅるっ……！どぷっ……！

揺子は、男の射精を
顔で受けながら、
嫌がる素振りも
見せない。死んで
いるのだから、当然
だった。

その後も、揺子は、親友の悠輝と共に、その死体を
徹底的に犯され、射精され、全身を精液塗れに
されていた。







